

墓制からみた弥生時代の始まり — 徳島地域をケースとして —

端 野 晋 平

日本列島における稲作の開始は、それまでの獲得経済から生産経済への転換を意味し、結果として弥生時代が始まる。これが列島史上の大きな転換点であることは間違いない。徳島という地域においても、それは例外ではない。徳島を代表する初期農耕集落である庄・蔵本遺跡では、水

田・畑などの稲作の痕跡とともに、それに伴う文化として、石棺墓・配石墓・土壙墓といった特徴的な墓制が調査されている。本稿では、これらを取り上げ、その系譜と、そこからうかがえる社会を論じること、この地域における弥生時代開始の実像に迫りたい。なお、徳島地域における時期区分は、中村豊の土器編年（中村二〇〇〇、二〇〇四）にもとづく。

徳島大学蔵本キャンパス内に所在する庄・蔵本遺跡は、徳島県教育委員会や徳島大学によって、これまで三〇次にわたる発掘調査が実施され、初期農耕集落の全体像が明らかとなりつつある。本稿で対象とする墓は、キャンパスの

南西部に位置する第六次調査地点（青藍会館地点）（徳大埋文一九九八）と、南東部に位置する一九九八年立会調査地点（ポイラータンク地点・排水管地点）、第二次調査地点（西病棟新営その他電気設備地点）⁽¹⁾の、二つのエリアに分かれて確認されている。

第六次調査地点で確認された墓域（以下、西墓域と呼ぶ）では、石棺墓一基、石蓋土壙墓一基、配石墓二三基、土壙墓六基、甕棺墓一基が確認されている。これらの所属時期は、弥生前期前葉〜中葉に収まり、墓の多くは、主軸方位をほぼ東西にそろえて、列状の墓域を形成している。石蓋土壙墓、配石墓や土壙墓の一部には、切り抜き式木棺が使用された可能性がある。墓からは、副葬品とみられる土器・管玉・石鏃などの遺物が出土している。これらの墓の系譜については、これまで各氏によって、響灘沿岸地域（石棺墓については朝鮮半島中西部）（北條一九九八a）、北部九州・響灘沿岸地域（中村一九九八）、北部九州（橋

本二〇〇一」といった地域の墓制に求める見解が提出されている。

一九九八年立会調査地点、第二二次調査地点で確認された、もう一つの墓域（以下、東墓域と呼ぶ）では、弥生前期初葉～末葉の石棺墓、配石墓、土壙墓（木棺墓の可能性があるものを含む）が数基確認されている。墓の主軸方位には、南北と東西とがあり、数をみると前者がやや多い。この点は西墓域とは異なる。出土遺物のなかには、横型流水文をもつ土器があり、これに近接する三谷遺跡との関係、さらに列島東部との関係を見る見解（中村二〇一〇）も提出されている。この土器が出土した遺構は、主軸方位が東西であり、土器の特異性とともに注意される。

そのほか、庄・蔵本遺跡に隣接する南蔵本遺跡の住宅開発工事地点では、墓の可能性をもつ土坑や甕棺墓が確認されている（勝浦一九九九）。これらは弥生前期前葉～中期初頭に属する。同遺跡の県立中央病院地点（徳島県教委・徳島県埋文センター二〇一四）で検出された、弥生前期前葉～中葉の土坑のなかにも、墓の可能性のあるものが含まれているようである。このように、弥生前期の眉山北麓においては、同時期に複数の墓域が営まれていたとみてよからう。

さて、これらの墓制の系譜は、どう考えることができよ

うか。結論から言って、これとほぼ同時期に出現する稲作とともに、この系譜は遠く朝鮮半島南部の無文土器文化に求められる。ここで注意しなければならないのは、「求められる」とは言っても、直接、徳島地域に伝わったというわけではなく、北部九州を介しているということである。²²

今日の考古学研究の成果からみて、半島南部の稲作とそれと不可分な関係にある文化は、列島のなかでもまずは北部九州に伝わったとみて間違いない。このときに導入されたのが、支石墓である。半島南部の支石墓のなかで、列島のものとの祖型とみなせるのは、地上に巨大な上石とその周囲に墓域を表示する敷石、地下に多量の石からなる墓室をもつものである。墓室の内部には、石棺や木棺といった遺体収納容器を設置した例も確認されている。こうしたものを祖型とするものの、北部九州の支石墓は、導入当初（縄文晩期後葉）から大きく改変されている。佐賀県大友遺跡、福岡県新町遺跡などの支石墓は、地上に上石こそもつものの、その周囲に敷石はない。地下の墓室は、半島のものに比べ、それほど石を多用しない、あるいは石を使用しないという具合である。つづいて弥生前期前葉になると、北部九州のなかでも、福岡平野では、弥生独自の墓制、木棺墓が成立する。すなわち、石を用いた施設が欠落し、内部の木棺だけが採用されるようになる。これは最古の弥生

土器、板付Ⅰ式の成立と時を同じくしている（端野二〇〇三）。北部九州では、木棺墓のほか、福岡県江辻遺跡、田久松ヶ浦遺跡などで、墓壇内に石を配した木棺墓や石槨墓などの墓制が確認されている。

こうした北部九州の多様な墓制は、板付Ⅰ式土器の広域伝播の波に乗って、列島西部各地へと広がる。徳島地域はそのうちの一つである。従来より、板付Ⅰ式の壺と甕に近似的土器が、列島西部で点的に分布していることが知られるが（田中一九八六ほか）、これが庄・蔵本遺跡でも出土しているという事実は強調しておいた方が良好であろう。^③ こうした土器が出土する遺跡は、稲作適地である低湿地のすぐそばに立地する点で共通する。庄・蔵本遺跡の墓制は、稲作とともに、北部九州から直接的に伝わったとみてよいではないか。そして、こうした文化の受容は、北部九州からの移入者と、それまでに居住していた在来者との「共生」（中村一九九八）のなかで行われたのではないか。

最後に、庄・蔵本遺跡の墓あるいは墓域のあり方から、当時の社会像について、新進主義の文化人類学者・サーヴィス（一九七二）の社会類型を用いて、言及しておきたい。これは、人類の社会が統合の度合いによって、バンド社会・部族社会・首長制社会・国家の四つに分類され、バンド社会から国家へと向かうにつれ、社会の成層化・複雑

化が進み、かつ統合の度合いが高まるというものである。

まず、庄・蔵本遺跡の弥生前期集落が、定住した稲作農耕民のものであったことは、これまでの調査成果からみて、明白である。そして、階層社会とみなす見解（北條一九九八b）もあるが、墓の構造・規模、副葬品をみても、個々の墓、墓域のあいだに、格差を認めることはできない。こうしたことから、当時は平等原理にもとづいた部族社会であったと考えられる。

では、同時期に複数存在する墓域は何を意味するのか。部族社会における一つの集落は、複数の異なる出自集団の分節からなると考えられる。ここでの出自集団とは、文化人類学では氏族あるいはクランと呼ばれ、共通の祖先・系譜観念をもち、外婚の単位となるものである。さらに、同じ平野や隣接する地域まで見渡すと、同じ系統の出自集団の分節が、他の集落に居住するといふかたちをとる（キージング一九七五）。これら複数の集落が、共通した祭祀や部族意識によって、一つに結合されるような社会が部族社会である。^④ 庄・蔵本遺跡での個々の墓域は、こうした出自集団の分節を表示しているのではないだろうか。

註

（一）現在、これらの調査成果をまとめた正式報告書の刊行を

準備中である。なお、第二次調査については、概報（中村二〇一〇）がある。

(2) 異論に対する批判はすでに終えているので（端野二〇一五、二〇一七）、ここでは振り回らない。

(3) 詳細は別稿で論じる。

(4) 日本考古学界で、こうした概念を前面に出して、列島先史社会を論じ始めたのは、田中良之（一九九八・二〇〇〇）である。本稿はこうした業績に倣うものである。

文献

勝浦康守一九九九「南蔵本遺跡（住宅開発工事）」『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要九』徳島市教育委員会。

キーンキング (Keesing, R. M.) 一九七五、Kin Groups and Social Structure (小川正恭・笠原政治・河合利光訳)『親族集団と社会構造』未来社。

サーヴィス (Service, E. R.) 一九七一、Primitive Social Organization: An Evolutionary Perspective. (松園万亀雄訳)『未開の社会組織—進化論的考察—』弘文堂。

田中良之一九八六「縄文土器と弥生土器」『弥生文化の研究三』雄山閣。

田中良之一九九八「出自表示論批判」『日本考古学』第五号、日本考古学協会。

田中良之二〇〇〇「墓地から見た親族・家族」『古代史の論点

二一 小学館。

徳島県教育委員会・公益財団法人徳島県埋蔵文化財センター二

〇一四「南蔵本遺跡—県立中央病院改築事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書—」。

徳島大学埋蔵文化財調査室一九九八「庄・蔵本遺跡1」。

中村豊一九九八「稲作のはじまり—吉野川下流域を中心に—」『川の間人』溪水社。

中村豊二〇〇〇「阿波地域における弥生時代の土器編年」『突帯文と速賀川』土器持寄会論文集刊行会。

中村豊二〇〇四「弥生時代前期末・中期初頭を考える—東四国の視点から—」『古代文化』第五六号、古代学協会。

中村豊二〇一〇「庄・蔵本遺跡・西病棟新営その他電気設備工事に伴う埋蔵文化財調査」『国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報』第二号、徳島大学埋蔵文化財調査室。

端野晋平二〇〇三「支石墓伝播のプロセス—韓半島南端部・九州北部を中心として—」『日本考古学』第一六号、日本考古学協会。

端野晋平二〇一五「近年の弥生時代開始期墓制論の検討」『古文化談叢』第七四号、九州古文化研究会。

端野晋平二〇一七「中村大介著『支石墓の多様性と交流』に対するコメント」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第七号、長崎県埋蔵文化財センター。

橋本達也二〇〇一「弥生時代前期朝鮮系無文土器の展開と徳

島」『青山考古』第一八号、青山考古学会。

北條芳隆一九九八a「第六次調査の記録」『庄・蔵本遺跡1』

徳島大学埋蔵文化財調査室。

北條芳隆一九九八b「弥生時代前期集団墓の構造」『庄・蔵本

遺跡1』徳島大学埋蔵文化財調査室。

(〒770-0036 徳島県徳島市蔵本町二一五〇—一

徳島大学埋蔵文化財調査室)